

「真白き富士の」

野瀬 隆平

昭和の歌謡曲をととき懐かしく思い出す。若い頃に流行った歌は、歌詞も七五調ですんなりと心に入り、冒頭を聞いただけで歌いだすことが出来る。例えば、
「真白き富士の嶺……」とくれば、
あの江の島沖でのボート転覆事故の悲劇を歌った「七里ヶ浜の哀歌」である。

ところで、同じく「真白き富士の……」で始まる歌謡曲がもう一つあるのを、年配の方ならご存じであろう。私が生まれる前年に出来た曲であるから、歌われ始めたころに聞いた筈はない。

しかし、この歌を聞くとどこか懐かしさを憶える。その歌詞は、

真白き富士の 気高さを 心の強い盾として 御国に尽くす女等（おみなら）は
かがやく御代の 山ざくら 地に咲き匂う 国の花

日本が戦争に向かう中で、国民の愛国心をかきたてる歌がいくつも作られた、その一つである。

「愛国の花」という題名のこの曲、このメロディーと歌詞を憶えているのは、戦時中あるいは戦争が終わってから、母が懐かしんで口ずさんでいたからであろう。

この歌が日本ではなく海外でいまだに歌われている国がある。インドネシアだ。しかも、それが国にとって大切な独立記念日の前後によく歌われているというのである。

太平洋戦争中に日本軍が攻め込んだ時、インドネシアはオランダの植民地になっており、スカルノを始め、独立運動の指導者が捕えられて絶望的な状況にあった。日本軍は数が少ないこともあって、現地の人を登用して官僚機構を作り、ジャワ防衛義勇軍も組織した。

日本の防衛戦略上の考えによるものだったが、結果的には戦後のインドネシアにとって大きなプラスとなった。スカルノ大統領が訳詩したインドネシア語版もある。題名は、「Bunga Sakura（桜の花）」である。

近年でも、黄緑色の服をまとった三十人ほどのインドネシアの女声合唱団員が、この歌を歌っている姿をネットで見る事が出来る。いまだに日本の古い歌を忘れずに歌ってくれているのだが、単純には喜べない何だか複雑な気持ちである。